

心温かい人々が暮らす町

## ～つながり合える社会のために～

現在、日本にはたくさんの外国人が暮らしています。身近な存在の外国人ですが、地域で出会っても「外国語じゃないと話が通じないのでは」と言葉への不安を持っている方も多いのではないのでしょうか。

実際は、簡単な短い日本語を使えばコミュニケーションを取れる場合が多いと言われています。こうした視点で生まれた、気軽に会話をする方法の1つとして、「やさしい日本語」を紹介します。

### 広がる「やさしい日本語」

「やさしい日本語」は日本語が得意でない外国人にも伝わりやすい表現方法として生まれました。きっかけは1995年の阪神・淡路大震災です。当時日本にいた多くの外国人が、日本語を十分に理解できず、必要な情報や支援を受け取れなかったという問題がありました。

現在「やさしい日本語」は災害時だけでなく多くの場所で広く活用されています。くらしの情報や観光情報の案内などに使われているほか、医療現場においても多様な国籍の患者への対応の手段として注目が高まっています。



#### ● 「やさしい日本語」のポイント

- ① ゆっくり話す
- ② 一文を短くして話す
- ③ 簡単な言葉に言い換える
- ④ カタカナ外来語、方言、擬音語はできるだけ使わない
- ⑤ 要点を具体的に伝える

#### ● 言い換え事例

- 「近所の者です」 → 「私は近くに住んでいます」  
 「今朝」 → 「今日の朝」  
 「バスは運転を見合わせています」 → 「バスは動いていません」

さらに、身ぶり手ぶりを加えたり、絵や文字を紙に書いたりするのも効果的です。

### 違いから得られる気づき

「やさしい日本語」には、「わかりやすく、相手を思いやって伝えよう」という思いが込められています。そのため、外国人だけに限らず、子どもや高齢者、障がいのある人など、たくさんの人とコミュニケーションを取ることができる手段の1つとも言えます。

私たちはみんな、一人一人の個性を持っています。時にはその違いに戸惑いを感じることもあるでしょう。さらに言葉や文化、習慣などの違いが加われば、なおさらお互いの間に壁を感じてしまうかもしれません。そこですぐに相手を否定したり、避けたりすれば、場合によっては相手を傷つけてしまうことにもなりかねません。そうではなく、お互いのことを認め合えば、自分が知らなかった価値観や考え方など、たくさんのことを学び合える可能性もあらずです。

さまざまな偏見・差別は、正しく知らない、知ろうとしないことから生まれます。相手の立場を考え、寄り添うための工夫には、決まった正解はありません。「やさしい日本語」を1つの例として、誰もが安心して生きられる社会を作っていくためには自分に何ができるかを考え、一人一人が身近なところから実行してみましよう。

町民一人ひとりが相手を思いやり、多様な価値観を認め合う社会をめざしましょう。

「心温かい人々が暮らす、にぎやかな過疎の町」美波町であり続けるために人権について考え守っていくことがまさに、「にぎやかさ」美波町まちづくりにつながります。このコーナーでは人権に対する思いを掲載していきます。

## ウミガメ No.24 News Letter

### 産卵数の調査から分かること

広い海を回遊するウミガメを知るためには、一か所の砂浜での調査ではわからないことが多く、様々な情報交換やネットワークが非常に重要となります。先日、鹿児島県屋久島に行ってきました。ここは日本最大のウミガメ産卵地で、産卵時期になると一晩に数十頭のアカウミガメに加えて、アオウミガメも産卵します。このような砂浜が複数あり、これらすべてを調査するためには非常に大きな調査作業量と人員が必要で、その確保に苦労していました。また、今年の夏には、美波町ウミガメ保護監視員の皆さんと共に、和歌山県みなべ町千里浜にも視察に行かせて頂きました。視察で伺った時は、ウミガメ産卵時期だったので、産卵上陸調査にも同行させて頂き、大浜海岸での調査方法や砂浜環境の違いを見せて頂き大変参考になりました。ここの産卵場は大浜海岸からほぼ真向かいの紀伊半島に位置していて、産卵上陸したウミガメが行き来した記録もあり、2つの産卵場を比較するための情

報交換が非常に重要な産卵地です。毎年、日本で産卵が確認されたウミガメの頭数は、これから集計されます。この作業は、NPO 法人日本ウミガメ協議会が日本各地のデータを借り受けて、1990年から毎年行っています。この集計作業によって、およそではあっても、毎年のウミガメ産卵上陸数の増減が見えてきます。全国で同じパターンで見られる増減から、毎年の産卵しようとしたウミガメの増減を知ることができます。ウミガメの産卵シーズンに全国の砂浜でウミガメの上陸産卵した跡が各地の調査員によって数えられ、集計するという単純な調査ですが、今年で34年目ともなると、ウミガメの産卵上陸頭数は単純に減り続けたのではないことが見えてきます。例えば、全国集計が始まった1990年～1998年にかけてアカウミガメの産卵回数は減少しましたが、2002年頃から2013年に一時的に増えた後、再び減少しています。今年、全国の産卵場ではアカウミガメの産卵数が非常に少なかったと聞いています。アカウミガメの産卵適齢期を20～30歳とするなら、このウミガメが生まれたのが、全国的に産卵数が減少した時期なので、ここしばらくは産卵するウミガメの数そのものが少なくなり、一時的に産卵数が増えた2002年～2013年に生まれたウミガメが産卵するころに産卵数が増えることを期待しています。(館長：平手康市)

うみがめについての質問をお送りください。お答えします!  
〒779-2304 徳島県海部郡美波町日和佐 浦369 うみがめ博物館カレッタ「質問係」



応募フォーム

Question

夜に砂から出てくる子ガメは、どうして砂の中でも夜になったことが判るの?

Answer

砂の中でふ化した子ガメは3～5日かけて砂の表面に上がってきます。この時、砂の温度が下がるのを待つため必然的に夜になるのです。でも、昼間でも温度が下ると勘違いして出てきてしまうことがあります。

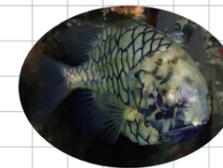
### みなみの海のいきもの図鑑

太平洋に面する美波町では多くの生き物たちが生息しています。このコーナーでは実際に撮影してきたリアルな写真と共にいろんな生き物たちをご紹介します!



### マツカサウオ

松ぼっくり(松笠)に似ていることからこの名前が付けられたマツカサウオ。体長約15cmの体がとても硬いウロコで覆われています。背ビレと腹ビレには大きなトゲがあり、外敵から身を守るために最強の鎧を着ているような魚です。背ビレ後方より後ろの部分は左右に動かすことができますが、硬い体をしているので動きはゆっくりです。日中は岩礁の岩穴などでじっとしていることが多いのですが、夜になると活動しエビ、カニの仲間などを食べています。マツカサウオの下あごの先には青く光る点があります。これは「発光器」といいマツカサウオ自身が光を放つのではなく、共生している発光バクテリアが光っているのです。この光りでエサをおびき寄せているのではと考えられています。(ダイバー：長楽美保)



マツカサウオの成魚



カイメンの中に身をひそめる幼魚